症例報告

経絡脈診（六部定位脈診）の臨床的考察

馬場 白光*

要旨 経絡脈診とは、脈の速さ・強さ等の他、十二経絡の虚実を判定する六部定位脈診である。

経絡の虚実変動の是正を鍼灸の治療目標として疾病治療に適応させようとする鍼灸治療者にとっては重要な診察法である。

しかし、経絡脈診に現れる経絡の虚実は、十二経絡中のいくつかの経絡の変動が関連して現れるので、どの経絡の虚実を治療目標にすればよいかを考えねばならない。その解析の思考に陰陽五行説を用いる。

ここに、経絡脈診と陰陽五行説による治療例をあげて、その必要性を示すものである。

I はじめに

経絡脈診とは、橈骨動脈脈診部で十二経絡の虚実を判定する六部定位脈診のことで、古くから伝えられている鍼灸治療のための診察法であるが、その評価は人によって著しく違う。

私は五行穴に鍼灸するときこれを用いて、優れた診察法であることを知った。

ここに3症例をあげてそれを具体的に報告する。

II 症例報告

症例1 54才 ♂ 会社員 初診昭和56年12月8日。

症病名 気管支喘息。

病歴 7年前発病、毎年数回入院した。最近の入院は昭和56年11月11日より12月2日まで12日間。

現症 呼吸が浅く、問診中もハアハア、ゼイゼイ言って会話が途切れる。室内の動作でも呼吸が苦しい。

経絡脈診 肺経と心経虚、三焦経と膀胱経実が著明である。

治療 肺経補の目的で右経渠（1－8）に4呼

吸の間置鍼したが、肺経虚の脈は回復しない。

次に、三焦経泻の目的で関衝（10－1）に泻鍼すると三焦経実と肺経虚の脈がやや回復した。

次に、膀胱経泻の目的で崑崙（7－60）に泻鍼すると膀胱経実と心経虚の脈がやや回復した。

そのあと、天柱（7－10）に泻鍼、関衝（10－1）と崑崙（7－60）に灸3壮した。

患者は呼吸が楽になったと訴えた。

第2日 12月9日

症状 対座して喘鳴は聞えぬ。聴診器を胸に接近すると、喘鳴が著明に聞える。

脈診 肺経虚、心経虚と三焦経実、膀胱経実が第1日より軽度である。

治療 第1日と同じ。治療後は気分が良い。

第3日 12月10日

症状 楽になったと言う。聴診器を胸部に当てるとまだ喘鳴が聞える。

脈診 肺経虚、心経虚と三焦経実、膀胱経実の脈の差が少なくなった。

治療 前日と同じ。

第4日 12月11日

症状 治療室に入る動作にスピードがあり姿に元気がある。良くなりましたと大声が出る。聴診器で右胸部に軽く喘鳴を聞くだけで呼吸困難は無い。

脈診 三焦経がわずかに実しているだけ。

考察 この症例は、脈診によれば三焦経、肺経、

※Hakko BABA「福岡地方会」

Key Words 六部定位脈診、五行穴、陰陽、標・本

膀胱経、心経の不調和が関衝（10-1）と崑崙（7-60）の鍼灸で回復し、喘息症状もおさまったのである。

五行的考察では関衝（10-1）は相火経の金穴でこれに鍼灸すると、相火経の三焦経実と金経の肺経虚に有効であった。崑崙（7-60）は水経の火穴でこれに鍼灸すると、水経の膀胱経実と火経の心経虚に有効であった。即ち五行穴治療は五行経相互の不調和の回復に有効であることが明らかである。

症例2 50才 ♀ 速記者 初診昭和56年12月7日

症病名 右肩関節周囲炎

病歴 10日前から右上肢挙上困難となる。

現症 右上肢挙上困難。仰臥位で右上肢痛のために夜は壁によりかかって眠る。

脈診 小腸経実、肺経虚、腎経虚が著明である。

治療 小腸経の小海（6-8）に泻鍼して小腸経実脈が良くならぬので、右天容（6-17）の硬結に泻鍼して更に小海（6-8）に泻鍼すると小腸経実の脈が良くなった。試みるに右上肢挙上可能となる。10分前まで挙がらなかった手が今挙がるのは何故か、不思議だと患者は言うて喜ぶ。

第2日 12月8日

症状 手が挙がったのは昨日治療後1時間だけで、また手は挙がらないと言う。

脈診 小腸経実、肺経虚、腎経虚。前日と同じタイプである。

治療 天容（6-17）小海（6-8）に泻鍼の他に、腎経の虚を補うために尺沢（1-5）腎俞（7-23）復溜（8-7）に補鍼。治療後右上肢挙上可能となる。

第3日 12月9日

症状 右手は挙がり、安眠し速記も出来る

考察 この症例は、天容（6-17）の硬結に泻鍼した後の小海（6-8）泻鍼で小腸経実の脈が良くなり症状が回復し、肺経と腎経の補鍼で再発を防止した。

この症例で標本を考えると“症状に直結していた小腸経実”の治療が標治法であり、小腸経実による症状が腎経補の治療で再発しないことは、腎経虚が本で小腸経実が標である。

経穴を五行的にみると、小海（6-8）は小腸

経の土穴で小腸経の泻穴、尺沢（1-5）は肺経の水穴、復溜（8-7）は腎経の金穴で、腎俞は腎経の俞穴でいずれも腎経治療の経穴である。

天容（6-17）の硬結刺鍼は小腸経泻の助けとなった。小腸経の標治である。

症例3 62才 ♂ 鍼灸師 教師 初診昭和56年12月7日

症病名 不眠症

病歴 3か月前から不眠続きで困っている。

現症 毎夜眠れぬ。

脈診 心経実、肺経虚、腎経虚。

治療 心経の泻を治療目的として少海（4-3）と靈道（4-4）と頸部に泻鍼。治療後脈はやや整った。

第2日 12月8日

症状 昨夜眠れず、頻尿に苦しんだ。

脈診 心経実、肺経虚、腎経虚。

治療 心経の泻と腎経補を目的として少海（4-3）靈道（4-4）天容（6-7）泻鍼、尺沢（1-5）復溜（8-7）肺俞（7-13）腎俞（7-23）に補鍼。

第3日 12月9日

症状 昨夜眠ったがまだ寝つきが悪い。

脈診 心経実、肺経虚、脾経虚

治療 天容（6-17）風池（11-20）の硬結に泻鍼し、陽輔（11-38）胆俞（7-19）に泻鍼、経渠（1-8）地機（4-8）商丘（4-5）に補鍼した。

第4日 12月10日

症状 寝つきも良く、良く眠った。

第5日 12月16日

症状 よく眠る。実は数か月前から講演中に頻脈胸中苦悶の発作があったが、12月13日と15日の2時間ずつの講演に発作が無く、これも治りましたと言う。

考察 この症例は、主訴が不眠で脈は心経実が著しかったもので心経泻で治ると思ったが効果なく、肺経虚回復のための胆経脾経肺経治療が有効であった。心経実が標で肺経虚が本であったのである。

脈の示すまま心経実と肺経虚を治療して頻脈の発作まで治ったことは経絡脈診の特色である。

III 総括

難経には補を先に泻を後にと書いてあり、類経には標を先に散じて後に実を泻し不足あれば補えと書いてある。

さて、症例1では、補を用いず泻の鍼と灸だけで有効。症例2では、標治に泻、本治に補を用いて有効。症例3では、標治で効なく本治で有効であった。

この症例によれば、難経説、類経説の何れを採用かは、症例毎に、標本の五行的關係を考えて、経絡脈診で具体的に選択すべきことが明らかである。

加えて、五行穴治療は五行経の変動に有効であることが明らかである。

IV 結論

私は五行的に経絡経穴を選んで鍼灸治療を行なう場合経絡脈診が重要であることを、以上の具体的症例によってここに提言する。

参考文献

- 岡本一抱 十四経絡發揮和解
 岡本一抱 難経本義診解
 張 介 賓 類経
 馬場白光 タノミ反射の方法論的考察, 日本鍼灸治療学会誌 第5回国際鍼灸学会特集号27巻第2号
 (〒810 福岡市中央区地行1-14-35)

A Clinical Observation on the Relation Between Meridian Pulse Diagnosis and the Five Elements

Hakko Baba, C. A.

Fukuoka

“Meridian Pulse Diagnosis” is equivalent to the “Pulse Diagnosis at Six Parts on the wrists” and “the Five Elements Theory” in traditional and symptomatic treatment is reported showing three cases.

Case I, Asthma : Acupuncture on Keikyo (1-8) was ineffective. Acupuncture and Moxibustion on Kansho (10-1) and Konron (7-60) was effective.

Case 2. Scapulohumeral periarthritis : Acupuncture on Tenyo (6-17) and Shokai (6-8) was effective in relieving the pain temporarily. By adding the treatment on Shakutaku (1-5), Jinyu (7-23) and Fukuryu (8-7), the symptoms were removed.

Case 3. Insomnia : Excessive energy was recognized in Heart Meridian. Sedation was given to Heart Meridian and proved to be ineffective, whereas tonification on Lung and Kidney meridians gave good results.

I will give my opinion on the clinical utility of “Meridian Pulse Diagnosis” and the selection of Five Elemental Points, mentioning the above three cases.